

五台山系華嚴思想の日本の展開序説

——明恵に与えた李通玄の影響——

小 島 岱 山

一 五台山系華嚴思想の日本への初伝

平成十一年八月十日号の『中外日報』に、中国仏教協会・仏敎文化研究所副所長の何雲氏が「仏国」の中の超大国といふべき五台山（中国仏教四大聖地の首位）、（中間省略）、山西省は中国古代文明の発祥地の一つだ。仏敎史上においても寺塔が林立し、名僧を輩出した山西省は中国仏敎の重鎮と称されている。（中間省略）。西晋末年には、北方の少数民族政権のほとんどは仏敎保護の国策を取った。山西生まれの後趙皇帝石勒は、仏図澄を「大和尚」として崇め学び、大いに寺院建立に励んだ。その後、北魏政権も国力を傾けて有名な雲岡石窟の造営を手掛けた。唐代は中国の仏敎の最盛期だった。五台山の仏寺だけで三百六十もあり、僧侶数は一万にのぼった」と述べている。今、五台山は多い時には八百人の僧侶でごったがえす、と聞いている。唐代には五台山に一万人もの僧侶がいたという。それがどんなにすさまじいものであつた

かが想像されよう。

既に筆者は、多くの資料を使つて、すなわち、中国大陸の仏敎史蹟を踏査して得た資料と文献資料とを統一的に理解する「東アジア仏敎学」に基づいて、五台山と五台山を中心とする周辺地域に、すなわち、五台山系仏敎文化圏に、五台山系華嚴思想の流れがあつたことを証明したが、そうした筆者の説を間接的にではあるが裏づける最新の資料のひとつが、冒頭に示した何雲氏の文章と言えよう。

さて、中国唐代の華嚴思想の流れには、五台山系華嚴思想の流れと終南山系華嚴思想の流れとがあつた。宋代の浄源に依る五祖説は真実の唐代の中国華嚴思想史を反映したものである。すなわち、学問的な唐代華嚴思想史ではなく、杜順初祖説に象徴されるように信仰に基づく唐代華嚴思想史であり、研究者各位におかれては、これからは極力その採用を控えていただけるものならばありがたいと誠に僭越ながら御提言申し上げる次第である。

ところで、この五台山系華嚴思想が日本にいつ頃入つてきたかという点、『奈良朝現在書目録』や最初期に日本に移入された華嚴典籍のひとつである慧苑の『刊定記』に李通玄の影響が見られることなどから、八世紀の初め頃と推定される。さらには、華嚴の典籍の公式のしかも大量の初伝とされる、道璿の将来した華嚴の諸典籍の中に、五台山系華嚴思想の初祖の靈弁の『華嚴論』百巻や大成者の李通玄の『新華嚴經論』四十巻が含まれていた可能性も十分に考えられ、そうなれば、西暦七三六年が五台山系華嚴思想の公式の初伝ということになる。

その五台山系華嚴思想は、例えば普機の『華嚴宗一乘開心論』の中に引用されたり、最澄の『依憑天台集』の中では系統的思想の流れの存在として正当に評価されるまでに至り、さらには凝然の『華嚴宗要義』には、「通玄居士造華嚴論等。專以觀門集成宗途」とあるなど、連綿と注目され続けたが、五台山系華嚴思想の最も大きな影響を受けたのは明恵（一七三—一二三三）である。

二 明恵に与えた李通玄の影響

筆者は現在、『五台山系華嚴思想の日本的展開』と題する著作を執筆中である。内容は、明恵の華嚴関係の代表作である、『華嚴入解脱門義』、『華嚴信種義』、『華嚴仏光三昧観』、

『仏光三昧観冥感伝』、それに『華嚴唯心義釈』、『仏光観広次第』、『仏光観略次第』の全文を短く区切つて李通玄の言句や思想と一つ一つ比較対照するというものである。筆者の研究の及んだ、これまでの範囲内で明恵に与えた李通玄の影響を論じてみたい。しかしながら、この場合、「影響」とは言え、影響を受けなかった部分も考慮に入れなければ、明恵の華嚴思想の特徴は浮んで来ない。したがって、こうした点にも配慮して論述してみよう。

(一) 十信位の強調と信心（十信）の内容

五台山系華嚴思想の流れを代表する観法は仏光観（李通玄自身は宝色光明観と言っている）であり、しかもこの仏光観のみが華嚴の種々なる観法の中で、唯一、具体的実践方法——と言つても、一種のイメージトレーニングの如きものであり、例えば、日本の臨済宗の看話禪に比べたら存在そのもの或は己事の究明にとつてはまこと実に弱々しきものであるが——の分かる観法である。仏光観は、前述した如く、華嚴の観法の中にあつて唯一例外の、身心陶冶の観法であつたので、又、光明真言との関係から、明恵の注目するところとなつた。そして、この仏光観は李通玄の解釈に依れば、十信位の行位の中で実践されるべき観法とされた。仏光観は十信位で修される観法であるという李通玄の仏光観理解の影響を受けた明恵

は、当然ながら、十信位と仏光觀との關係に、ひいては、仏光觀そのものについては言うまでもなく、十信そのものについても強く思いを致すところとなった。明恵の『華嚴入解脫門義』が具体的論述としては、十信位中の如来の十徳（十信位中の「光明覺品」に基づく）や十甚深の法（十信位中の「間明品」に基づく）の詳しい論究で始まり、続いて仏光と十信とが詳述されるのも、さらには、『華嚴入解脫門義』の直後に著述された『華嚴信種義』において、李通玄に端を発するものではあるが、明恵に独自の信の理解が為され、如来の十徳と十甚深の法とが一段と深く追究されるのも、すべて根本的には、今、述べた理由に依る。

ところで、李通玄は十信位については、ひいては、信という存在を次のように理解した。十信位中の信の修業、これを信修と呼ぶが、これは因から果への変遷、転移の信と李通玄は把握し、しかも、因と果とが乖離している、こうした信は、十信位以外の他の行位には存在しないと李通玄は理解した。そして、こうした信を李通玄は迷いの信、迷いの信心と呼んだ。したがって、この信、或は、信心から十信位を捉えた場合には、十信位は迷いの位となり、信満成仏も成り立たず、そうであればこそ、この十信位に於いて仏光觀が必要なのだと李通玄は主張した。さらには、その結果として、李通玄にあっては成仏論としては初住成仏が成立するということにも

なった。勿論、李通玄は、信、信心を常に迷いの存在とのみ把握していたわけではない。『華嚴經』の内容に即する信、信心、すなわち、因果同体融通無礙の信、信心も存在するとし、さらには、こうした信、信心に支えられた十信位は、他の行位と常に相即相入の關係になっていて、他の行位を根底で支えるものと李通玄は理解した。

以上を、実践行という因果の立場からまとめれば、次のようになろう。李通玄は、信には因果同体の信と、因果乖離の信との二種類があるとし、因果同体の信は十信位を含めた全行位に、因果乖離の信は十信位のみに存在するとした。仏光觀は、この因果乖離の信からの、すなわち、迷いの心からの脱却のためであると李通玄は見做した。

こうした李通玄の思想を明恵は充分に理解した上で、明恵は独自に次のように李通玄の思想を受け取り直した。明恵は、信心（十信）は、如何なる場合にも悟心（開悟心）と捉え、仏光を以て、信（心）と智と行との融合した意味での信（心）の象徴とした。そしてこうした信心（十信）を、実践的立場から、因果同体の十信と把握し、因果乖離の信心の思想は捨象した。そして、因果同体の信心（十信）を具体的には三つの方面より理解した。すなわち、明恵における信心（十信）の具体的内容であるが、一つは、十信の行相、二つには、如来の十徳、三つには、十甚深の法、である。最初の十信の行

相は、終南山系華嚴思想の流れにあつては、十信は行そのものであつて、十種の相が存在しないと理解されていたが、李通玄が十信位中の「賢首品」を使用して、十信位の各位にそれぞれ違つた行相を与えたために、文字通りの十信位が成立し、それを明恵が利用したわけであり、十信位の意味がさらに一段と深まり、強調される結果となつた。二つ目の如来の十徳は十信位中の「光明覺品」にその源があり、李通玄がそれを採りあげ、明恵がさらに信心（十信）は如来の十徳と等しいものとまで強調したわけである。三つ目の十甚深の法は、同じく十信位中の「問明品」に存する思想で、それに李通玄が注目し、さらに明恵が信心（十信）の属性として位置づけて、強調したということである。

なお、悟りの心としての信心（十信）に裏づけられた観法が、仏光観であると明恵は理解していることになるから、明恵にあつては仏光観は、悟りの世界を楽しむ観法と言えよう。一方、李通玄にあつては、信心（十信）は基本的には迷いの心（位）と考えているので、李通玄にあつては、迷いの世界からの脱却のために仏光観が存在すると分かる。理論上は、このように考えられよう。

(二) その他の影響関係

華嚴思想理解の基礎は、明恵も李通玄の思想をそのまま採

り入れて、毘盧遮那、文殊、普賢の三聖円融思想となつてゐるが、李通玄にあつては、仏智と自智とは同等であると言つて、自己を仏と同一のレベルにまで引き上げて両者の存在の同位なることと両者の有する智の等価なる点を主張するが、明恵には、そのような自己自身への強烈なる存在肯定意識はなく、むしろ自己存在を否定し去り、消し去つて自己自身が仏の世界に融（と）け込んで行くかたちになつてゐる。

明恵は『華嚴入解脱門義』で、「唯だ須らく閑林に思いを凝らして五欲の塵動を離れ、禪坊に身を安じて以て三昧の妙行を修すべし」と述べているように、離世間的、ないしは出世間的な禪定（三昧）理解を示しているが、同じく仏光観を修したとは言え、李通玄とはその受け取り方が正反対である。李通玄は、大苦海こそ大智慧海と宣言し、離世間は利世間の間違ひではないかと主張するほどであり、現実から逃避するための仏光観を説くことなどあり得ない。

又、明恵は『華嚴入解脱門義』で、「若し唯能辨を誇らんとするのみならば、孔老の史書にて足る可し」と述べて、中国固有思想を見下す発想をしているが、こうした考え方は李通玄には、さらさらない。老易一致の華嚴思想を構築したのが、まさに李通玄であつたのであり、こうした立場からすると、明恵は李通玄の真意を、この点に関しては、何も理解していなかつたということにならう。しかしながら、こうし

た明恵の態度は、同じく李通玄の影響を受けた韓国の知訥（普照国師）にあつても同じであつて、結局のところ、李通玄の中国固有思想についての主張に後世、関心を持った人々は、中国人のみと知られる。

さらに、明恵は『華嚴入解脱門義』で、「初の中、夫れ衆生が知識に遇い、仏法を聞き、進修し證入する始終の因果に、総じて六位有り。十信十住十行十廻向十地仏果是れなり」とある。明恵にあつては、十信位から始まつて十地までが五位であり、それに仏果位が加わつて六位となつてゐる。しかしながら、李通玄にあつては、仏果位は行位としては捉えられておらず、むしろ、修證一如としての理解となつていて、明恵の行位論で言えば、十信位から十地位までの行位を實踐することが仏果位の具体的顯^{あらわ}れとされている。しかも、李通玄にあつては、十住位から十一地としての等覺位までを五位と見做したり、十信位から十地位までを五位と考えたり、時には、十信位から十一地の等覺位までを六位と表現したり、いろいろである。なお、李通玄にあつては、十地位↓十一地の等覺位↓仏果位と続くのであつて、妙覺位は基本的には全く考慮されていない。なお又、李通玄は不思議にも、十一地の等覺位を十種の行位に細分し、十波羅蜜をそれに当てはめて理解している。明恵にとつては、総じて、李通玄の行位論は、複雑怪奇で到底素直に受け容れられるものではなかったのだ

あろう。

さらには又、『華嚴入解脱門義』の中に「如来の十徳」という項目があり、そこには、李通玄の言葉としての「如来の法身無性の徳」というのがある。法身を無性なるものとして李通玄は徹底否定した。そうであればこそ、無盡無限無礙の働きが法身に顯現してくるというわけである。しかしながら、明恵は、唯識や如来蔵系の華嚴思想である終南山系華嚴の法蔵や、さらには、五台山系華嚴と終南山系華嚴とを折衷した澄観の影響を強く受けて、李通玄の「如来の法身無性の徳」という思想に対して、それを心から納得できない自己自身を嘆いている。

（キーワード）明恵は信滿成仏、李通玄は初住成仏、因果同体の信心、因果乖離の信心

（華嚴学研究所・文学博士）